トケシ道場

福島県立医科大学附属病院　初期研修医（２年目）　横川　哲郎

見学した範囲では特にアメリカと日本の医療レベルは変わりなかった。しかし今回の研修では精神的なもので得るものが多かった。

特にトケシ先生が患者様より目線を低くして問診を行っていたことに僕自身反省することがたくさんあった。その’心構えは召使い’という考え方に学ぶものが多い。

僕は 1 年半しか医師をしていない新米医師である。しかも社会人としても 1 年半働いただけの新人だ。まだ社会人として仕事の内容も一人では全然できないし、人との付き合い方もうまくできているとは思わない。そんな僕が社会の先輩である高齢の患者様方に医師として接している。しかも医師として接すると、どうしてもこちら

【JABSON 近くの海】

の立場が上になりがちである。患者様=先輩に上からの立場で接する違和感を、医師になり始めてずっと感じていた。いや、医師として働き始めて半年ぐらいから感じ始めたのであろうか。実際、なりたての去年の 4 月～9 月の間は患者様と同じ目線、ベットサイドでしゃがんで患者様とお話をしていたことを覚えている。そのころは自分の知識が今よりもずっと不足していたこともあり、患者様からたくさんのことを学んだ。例えば、単純な話であるが、1 日 3 回内服必要な薬は飲み忘れが多いので代用がきくときは避けたほうがよいことや、肌が弱い方の傷でテガダームを張る必要のある時は、テガダームをできるだけはさみで小さく切り、最小限の大きさで傷を覆うと効果的なことなど、たくさん覚えることがあった。

たった 1 年半の間であるが、1 年目の 10 月くらいからかベットサイドで立って患者様と話をするようになった。徐々に自分で手技ができるようになり、また、検査所見の解釈ができるようになり、点滴のオーダーが出せるようになるにつれ、そちらに気を取られ、成書を購入し熟読することや、エビデンスを求めて英語の論文を読み進め、学会発表をし、周囲と議論することに重点を置くようになり始めていた。

もちろんそれらのことは重要である。しかし重点はどちらにおいたらよいのであろうか。患者様と同じ目線で話をすることと、学術的なことのどちらがより重要なのか。僕は患者様と話をすることにより重点を置いた医師人生を歩みたい。もちろん学術的な活動も行うが、それは患者様に利点があるからであり、患者様が先に来るものと考える。

僕が海外研修に参加している 11 月上旬に、日本で 10 月半ばごろから毎日回診に行って

話をしていた患者様が病院で亡くなられた。最後の瞬間に立ち会えなかった。自分の学術的なこと(海外研修)を優先して、患者様を看取ることができなかった。これには言い訳できない。後悔しか残らない。僕は口だけの人間である。いくら理想を述べても、現実で行動に移せなかったら無意味である。’召使い’失格である。この文章(全体の感想)を帰国翌日に病院で僕は書いているが、今の僕の医師としての態度を改め、患者様により重点を置いた医師人生を歩もうと思い帰国してきた僕の海外研修の感想は、とても複雑で文章にするのは困難そうである。

最後ですが、今回の研修にご尽力頂いた先生方、御一緒に参加させていただいた先生方、本当にありがとうございました。